

# 石川県の社会体育

その沿革、事情など

桜

井

栄七郎

# 石川県の社会体育

— その沿革、事情など —

桜井 栄七郎

## 目次

まえがき	132	戦後の社会体育	146
明治における社会体育	137	一、県スポーツの再建・国民体育大会	146
大正・昭和（戦前）における社会体育	137	二、協会とスポーツ団体の活動	148
一、教員の体育活動	137	三、今日の社会体育	151
（一）参加活動	138	（一）指導者・行事・活動など	151
（二）研究活動	139	（二）施設・費用	156
二、国の内外競技と県の事情	141	（三）組織	159
三、戦争期の活動事情	144	あとがき	

## まえがき

こんにち社会体育といっているものは、学校の教育課程として行なわれる体育活動を除き、おもに青少年及び成人に対して行なわれる体育活動のことである。それはスポーツとレクリエーション recreational activity を内容としている。

スポーツという言葉は、英語を通して世界にひろまり、娯楽、慰安、緊張からのくつろぎなどの外に、古くから中核的に意味する内容として、野外における楽しい身体活動ということを現わす言葉であった。しかし、これは歴史的にも社会的にも変り、一義的に定め

ることはむづかしい。一九六四年、スポーツ・体育の国際会議（東京）で、スポーツについての宣言が行なわれ、「スポーツは、遊戯的な性格をもつとともに、自己闘争という型をとるか、あるいは他人との競争という型をとるところの身体活動であって、それが他人との競争という型をとるときには、スポーツマン・シップの精神をもって演じられなければならない。またフェア・プレイの理念がなければ真のスポーツといえない」と述べられた。スポーツを広い意味にとらえたものであろう。スポーツ振興法（第二条）でも、スポーツを広義にとつて「スポーツとは運動競技及び身体活動（キャンプ活動その他の野外活動を含む）であつて、心身の健全な発達を図るためになされるものをいう」と定義している。従つてスポーツは、楽しみを求めたり、運動技術の向上を目指して自由時間（余暇）に自発的に行なう遊戯的な性格をもつた身体活動であるといえよう。これには色々の種類があるが、学校体育だけでなく社会体育の主要な活動内容を成している。レクリエーションについては、今

## 明治における社会体育

### 一、武術、相撲など

柔術、剣術、槍術、弓術などは、日本古来の運動で、特権階級の文化としてかなり以前から武士の間で行なわれていたものであるが、遊戯的な性格をもつスポーツとは異つて、実戦のための技術であり、精神修養の手段であつたため、スポーツとして一般社会人に引継がれるまでにはかなりの時間がかつた。四民教導を目的とし

日では「余暇価値を獲得しようとする態度で、余暇時間中に當む活動に参加する過程である」と定義するものがあるように、活動における価値追求の態度を重要視するまでに考えられている。もともとは「仕事その他の必要から解放された自由な時間になされる自発的な活動のすべて」をさしていたものである。ともあれ、社会体育の内容として、レクリエーションがあるということは、活動としてのレクリエーションもさりながら、活動に参加する過程に見られる価値追求の態度が、その内容の一つの側面を構成していることを意味している。

ここで述べようとする社会体育は、スポーツの価値や自己充足、自己陶冶などの余暇価値を含んだ教育的価値を獲得しようとする態度で、余暇時間中に、運動を中心として行なわれる身体活動を意味するものである。ここをおもな観点として、当地方体育の沿革や事情について考えて見ようと思う。

て寛政四年（一七九二）創立された加賀藩の武学校、経武館は、柔、剣、槍、弓術の外、居合、馬術、体術、組討、棒術、長刀、鎌、單螺と五〇有余の流派を擁していた。藩主の武芸奨励もあり、天保十年には師範の数も六十八人に達したという。しかし乍ら、連綿七十年を誇った経武館も明治三年、仏式軍制の採用、常備軍隊の

組織、士官養成所の設立で閉鎖された。一般に剣術道場や師範の生活が、経済的に苦しくなり、そのあるものは打開策として、撃剣興行（明治六、東京浅草、榊原健吉ら）を催したりして社会人の関心を集めた。九年に帯剣禁止令が出て下火になったが、その後、十二年に警視局が警察官教育の教材として剣術を採用するようになったため、その影響もあってか、撃剣会などが流行し出した。これに較べて柔術は復活がおくれ、明治十六年嘉納治五郎が下谷永昌寺書院に道場を開いてから復興し、二十七年、小石川富坂町に専用道場を建設するに至って、次第に盛んになった。また、水練術は、廃藩間もなく、水泳道場が一般社会人を対象に開設（東京浜町河岸）され、そこで伝授されていた。

このように日本古来のスポーツは、学制が公布（明治五）されても、学校教育の中に採られることもなく、道場を中心に行なわれていたのである。社会体育のきざしといわれようか。「金沢の百年」（金沢市編さん室）には「明治十年十二月十四日、剣術家鈴木行死去。七十二才、黙斎と号し鹿島神伝流の剣法に達し門弟が多かつた」「明治二十一年八月十五日、天徳院で山岡鉄舟の追悼会が催された。参会者二百〇余人」などある。また輪島町史によると、幕末前田藩治下の頃、四〇名の藩士が上の山に警備のため駐屯しており、銃卒稽古と称して町民を徵募して武技を練っていたという。その後、前記神原の門下であつた石山軍太が巡查として赴任し、退職後上町道場（鳳至、岡本漆器店の跡）を開いた。警視庁の武術大会は明治十七年から催されたが、これにはおそらく当地の警察からも参加しておつたのであろう。また、日露戦争の影響を受けて武徳会が誕生したのは明治二十八年、三年の後には県にも支部ができて一般の普及をはかった。すでにこの頃は学校でも、四高や師範学校

で柔剣道が行なわれていた。

神話として伝えられ、六三〇年に更に正史に現われている相撲は「帝に娯遊に止らず武力を練る」法として朝廷の奨励をうけ、下って政權が幕府の手に移ってからは、武人の間に練武の法、必修の一科として練磨された。これが、戦国の世に職業的専門力士を生み、興行化し、競技化して一般士人の興趣の対象となった。北陸地方の相撲も、天長十五年に朝廷が広く天下に七つの国に臂力の士を求めた際、加賀、能登に指令があつた所よりすれば、己にその頃には行なわれていたものである。加賀藩には、いわゆる御袍相撲があり、寛永十一年、金沢城内玉泉院丸の築山工事に相撲組五十人が人夫として出役している。その後、これが廃されてから職業相撲が多く生れ、都会の勸進相撲にならって、この地方を興行してから盛んになり出した（金沢市史、風俗編）。横綱として知られた阿武松緑之助（鳳至郡七海村）はその頃の人。卯辰山で執行された招魂祭（明治五年）や、藩祖の開沢三〇〇年祭などには撃剣や競馬などと共に相撲が奉納されている。また前記職業力士との関係で、明治十五・六年頃より尾山神社、尾崎神社の境内で興行が行なわれた。今日続いている七尾の相撲は十六年より町の人々の間で始められた。当時よりの隆盛をしのぶ諸行事や語り伝えられる能登地方の若干の例を示す次のようである。

羽咋市の唐戸山（神事相撲九、二五）、津幡町の八朔相撲（供養・慰安九、一）をはじめ富来町の出世相撲（宮廷相撲の予選会九、二）、蛸島の恵比須相撲（大漁祈願一〇、一〇）、能登町えびす講相撲（大漁祈願一〇、八）、中島町のお熊甲相撲（奉納九、二〇）、穴水町の六所山相撲（御詣相撲、八朔相撲九、二）、正院の招魂祭相撲（戦死者慰霊七、一）、能登町の観音相撲（上日寺治病祈願一

○、(一八)その他、飯田の御請相撲(年貢米完納祝、天長節相撲)や、富来、鶴飼、松波(本光寺、妙慶寺、松岡寺)の引上会相撲。

更に津幡町の一地域について見ても上述の八朔相撲を初め、俱利伽羅竹橋、潟端新、川尻、能瀬、興津、池ヶ原の放棄相撲、その他があった。これらの相撲は、殆んど神社に寄せた神事相撲で、その歴史も、古い時代の素朴な土俵を特色とする唐戸山の垂仁天皇の御代から、たまたま、上記部落相撲に優勝力士を産出したことから起ったものまで様々である。多くのものは明治末に、あるいは昭和の戦後に消えて了った。奉納相撲として神前で純粋に力を競い合う、勝者はその印として御幣を飾って帰り、村人は素朴にこれ喜び合う、その誇らしさと楽しみが見えるようである。

近在の人びとはこれにあやかうとして力を養い、技を磨いたのである。庶民的なスポーツのない当時の人々にとって、相撲は唯一の身体活動であり、この行事をとりまく品物市や各種の娯楽と共に、生活において欠くことの出来ないレクリエーション的な部分であった。言ってみれば相撲そのものは身体的教育の営みとすることができし、この地方の人々にとってたしかに社会的な意義がみとめられよう。ただ、その衰微のあとを見ても分るように、種々の原因はあるにしても、催しに伴う褒賞と飲食など、金銭関係の弊は、なお封建性を留め、社会体育としての活動を阻害するものであるのは残念である。相撲についての記録は殆んどなく、古老の語るのを聞き伝えるか、あるいは神社、仏閣にかかげられた大関位獲得力士の偏額や力士たちの碑によって伺うことができるだけである。

また、人のもつ力を競う点で相撲と関係深い運動に「磐持ち」がある。これは「力試し」「力較べ」に用いる磐持ち石や俵などを担いだり、さしあげたりする self testing であり、相手と競うス

ポーツである。徳川中期の頃が起源といわれるが、相撲がすたれて了った町村でも磐持ちちは青年たちの間で行なわれたようである。石を持ちあげることにによって部落の人々は、かを一人前の男子として認めた。このような身近な嘘のない目標は、青年たちにとって恰好の自己試しであり、それが一つの自信ともなった。結果としては確かに体を鍛え、ひいては、力動的な力のいる相撲というスポーツに近づける立派な身体を作りあげていった。勿論その身体的な自信は成人としての考え、行動総べてに通ぜぬ害はなかったであろう。門前町では三月十二日、神明神社祭礼の際、境内で行なわれ、六斗五升、八斗、九斗六升などの石が今でも置かれている。また能瀬にも「三十五貫力石」と刻まれた石があり、興津では各家々にあったと語られている。

その他、この地方の武士の遊戯として古くから烏指、堀鞠、鰯釣、百筋、夜興遣があげられ、(金沢市史)「……廢藩の後、放鷹のこと全く廢れたけれども山鉾、川漁は今尚ほ行はる」と述べられているように若干の遊びが行なわれていたようである。また兒童の遊戯には歌留多、旗遊、盤雙六、繪雙六、福德、福引、針打、針打絵、紙鳶、羽子突、手毬、独楽廻し、竹馬などあったが、概して室内遊戯が多い。今日時期を限って特に行なわれるものもあるが、殆んどはこの時代及び大正初めでなくなったようである。

以上のように、わが国特有の運動は早くから行なわれていたが、これらとても、何処でも手近かに採りあげられたものではなかった。

## 二、運動会、スポーツの萌芽

今日行なわれている、いわゆる近代的スポーツを見るようになったのは学校においてである。創設の早い師範学校では、明治十八年に「學術講究会」として校友会が組織され、運動部の活動はその頃から、銃鎗、ローン・テニスなど七部があったようである。第四高等中学校（後の四高）は二十年の創立、その校友会規則には撃剣、弓術、ベースボール、フットボール、陸上運動、相撲、遠行があり、程なくローン・テニス、柔術が加えられ、端艇は二十九年に始められた。尋常中学として明治二十六年に発足した県立一中では、第一号の「校友会雑誌」（三十一年）に「……此部に限り従来単独に其設けありしも……」とあるように寄宿舎で「斯道会」として行なわれたのが始まりで、撃剣、柔道、機械体操、打球（野球のことか）について述べている。また三十五年にできた三中（小松）四中（七尾）でも課外の活動として同様な運動が行なわれた。二十八年、四高柔、剣術寒稽古の納会には広く市内の官衙、学校及び諸劍客に招待状を送っている。フットボールについての記録は見当たらないが、野球、庭球は校内の活動から対校試合に広がり、更には隣県の学校と試合をするようになった。師範学校での経験をもった卒業生と共に漸次その影響は県内一般に及んで行ったことが想像される。ボートの普及は学校に止まったとしても、町村の人々が参加した小学校の運動会や師範の年中行事の長距離競走（三十六年頃）、金石浜の水泳練習会などは、地方の人々と関連なしに行なわれたとは考えられない。一般の人びとのためにできた金石海水浴場は明治三十一年、小舞子はその五年後に開設された。白山登山は、明治二

十年頃から師範学校で武装行軍として行なわれたが、遠行として出発した四高の旅行部が山岳団体として誕生してから、広く学校運動部の中に持ち込まれるように発展した。

この地方の運動会は古く、殊に小学校においては明治十九年（三月）から催され、その流れは今日に及んでいる。四高運動会は盛大で「明治の運動会は、大学高専を地盤に自然発生的に発展し、ただ運動娯楽の機会ばかりでなく大規模な集会の機会でもあった。従って、運動会は競技的な慰安と同時に政治批判やら社会風刺などを伴った。運動会とは、こどもの行事ではなくむしろ大人の行事であった」（近代学校体育史）とあるように、そうした景物もつくられ、第一回運動会（二十六年十一月）の見物人は「……数は幾万にも達した」（北辰会雑誌一号）という。内容も、ローン・テニス、ベースボール、フットボール、弓術が同時に行なわれ、その後、競走、高跳、竿跳が競われた。小学校の場合は、近隣諸学校合同で、二十一年には五、五〇〇人が集まり、その会場も石川郡普正寺浜、大野浜、出羽町練兵場あるいは大乗寺山と諸所で開かれ盛んであった。その間種々の反省、批判もあり、明治三十三年には志波県知事は「奨励会運動会に関する訓令」に「運動会ヲ舉行シ兒童ノ意氣ヲ養成スルハ体育上最モ望ムトコロナリト雖モ之カ为数日間ノ休業ヲナシ又尋常小学生徒ヲシテ数日ノ宿泊ヲナサシムル如キハ不都合ニ付今左様ノ儀之レナキ様監督スヘシ」（私立石川県教育雑誌第十号）と戒めているが、盛行と共にそのゆき過ぎも伺える。事実それらの中には「……各小学校の運動会が動もすれば徒らに形式に走り

て外観の美を競い、或は一時的のお祭騒ぎを為して来観者の歓心を買ひ、甚しきは縦令校友会の名義を以てするにせよ、児童をして寄附金の募集に奔走せしめ宛然一種の興行の如き観を呈するものあるに至れるは豈に憂うべきにあらずや」(石川県教育雑誌一一八号)というものもあつた。しかし乍ら、観衆である一般の人々や父兄は、それぞれに運動そのものから、あるいはまた、催しに対する態度として多くのものを同時に学んでいったことであろう。

こうした運動会や校庭における実際の身体活動は、それぞれの学校の会誌に報道されたが、更にひとびとの体育的関心が強められたと考えられるのは、それら誌上の関係記事や論文であろう。「運動場の秋」(四高、北辰五号)、「剣術科につきて」(剣、柔大会に於ける岩崎先生の講話)、「正月の遊戯」(人格の修養は体育にあり)「(一中、校友会雑誌一二号、)」「独人ベルツ博士の体育に関する意見」(「体育論」(私立石川県教育会雑誌、一、六号)「我校の運動会を基として一般のそれに及ぶ」(同九六号)「体育について」(第四高校校長吉村寅太郎、二六号)など。特に二十五号における「体育場設置の議」は、「……不幸にし一旦彼我の間に衝突起らんか唯鉄火あるのみ此時に当り国民たるもの貧富貴賤を問はず直ちに武裝して櫛風沐雨の勞をいとはず瘴癘の地山河の險も避くるなく百難を冒し万艱を排し勇往果敢以て公に奉せざるべからず……」の思想はあるにしても「強健は吾人最大の幸福、国民の強健は國富」として、また頽廢した青年の風儀を救ふ一つとして社会教育施設をつくることを訴えている。そして、「我兼六公園々内に一大共同体育場を設け普く県民の使用に供し」ようと「県下の教員諸君」に告げたものは注目し値する。

京都、東京市で、小学校あるいは中学、師範学校の運動場を修業

後に開放して、児童や公衆体育を奨励したことから文部省が地方長官にその旨通牒したのは明治三十六年である。この年(十一月十八日)県においてもはじめて、公衆体育のため学校の体操場が公開された。使用にもいろいろの制約があり、また、ただちに多くの入たちが運動を始めたとは思われないが、社会体育にとっては画期的なことであろう。

また、行遊の地と考えられた場所について、明治三十九年頃、師範学校の附小が定めた「校外運動細目」(石川県教育会雑誌四四号)を見ると野田山、宝門寺など三十数ヶ所があがっている。学校のことであるから、教育的な目的で行なっているもので参考になると思う。観察事項には、花木、史蹟があり、学校、軍隊、銀行、会社があるが、雪見や山川の遊び、楓、兔狩、茸取り、温泉、さまざまである。学年、季節によつて歩程距離も加減しているし、運動具携帯が多い。また、目測、歩測、練兵と訓練が含まれている。しかし乍ら、後述する今日の行楽地や遠足の対象場所となっている所からすると、当時からこうしたレクリエーション活動は、一般にも行なわれていたのであることが察しられる。

わが国として明治末期はスポーツの普及期といわれ、また学生を中心としたチームの組織が固まり外国との往来が始まったり、社会人のスポーツも行なわれ出したが、地方では学校の課外の域を出なかった。中央では新聞社の主催する競走や庭球大会が行なわれたが、この地方における新聞は小学校の連合運動会や競馬会を報道する位のものである。附録まで付けて扱っているのは第九師団臨時招魂祭(明三九、四)の競馬(野村練兵場)、相撲、自転車競走(歩兵第七聯隊營庭)で、こうした記事は二、三日にわたっている。また武徳会本部の大会予告や京都の武徳会参加を奨励して県支部が鉄

道割引を交付する、などである。しかし、学校を主にして行なわれてきたスポーツは、国民体育の奨励を目的とし、国際オリンピック

に日本を代表する団体として、明治四十五年に大日本体育協会が創られ、いよいよ国内への普及と組織の時代にすすんでいった。

## 大正・昭和（戦前）における社会体育

学校の課外運動として根をおろしたこの地方のスポーツは、徐々に育くまれつつ大正期に入った。第一次世界大戦後、世をあげての経済不況にもかかわらず金沢市をはじめとするこの地方の近代設備は徐々にすすめられ、明治末の百間堀埋立による市内交通の便、温泉を連ねる加南線の完成、市電開通（大八）、さらに馬車、人力車に代って石川線、松金線、能登線などこの年代を通じて多くの交通網が開かれた。富山、直江津間の鉄道敷設で東京への経路が生れたのもこの頃。この間は、わが国における自由、民主、社会主義と思想の開花期で、教育においては近代的な自由教育の思想が展開した。スポーツにおいても、あたかも不況にはむこうように隆盛を見たのである。しかも史上の大正は、しばしば見過ごされ勝ちの時代といわれるが、地方体育スポーツの点でその発達から見直すときは、じつに特色ある時期であると考えられるのである。

学校においては普通体操はスエーデン体操に代り、兵式体操は教練となり、更に遊戯の研究によってその価値も強調されるなど、明

### 一、教員の体育活動

活動の働きかけに二つの面が考えられる。一つは教員自身による運動競技への参加、指導、会合の開催による。他は研究や理論活

治後期の胎動を経て大正二年教授要目が公布され、統一的な学校体育の方向が具体的になった。そのものについては批判の余地もあらうが、当時としてはこうした指針の明示にこそ大きな意味があった。

この地方のスポーツは、小学校などの運動会、中学、師範、四高の校内大会、対抗試合という苗床で萌芽し、培われて大正期に入り、課外活動としてますます活発となった。更に昭和初期にかけて組織的な競技スポーツへと発展して行った。この間、新しい教授要目による体育課業と、永い伝統を持つ師範の運動部生活を経験した多くの教員の現場活動は、その発展に一層の拍車をかけ、社会体育の基盤をもつけた。このような事情は、おそらく全国同様の趨勢とも思われるが、地方体育スポーツの史的事項として特異のものであろう。その意味から、ここで当地方における教員の体育活動について若干述べて見ることにする。

動、つまり研究会や発表機関による体育スポーツの研究発表の活動である。



(一) 参加活動 教員が体育運動に積極的に関係を持つようになつたのは大正初め頃からのようである。当時、各郡の教育界における体育関係の団体機構、催物について行なつた調査「教員社会の体育施設」によると、能美郡の庭球団、河北郡の遠足隊編成(大五)、体育会の開催を始め、それぞれの郡で年を追うて類似の団体がつくられ、催しがなされた。また、河北郡体育会では、男子は剣道、庭球、競走、円盤、砲丸、槍投、走中跳、走高跳、リレー・レース、綱引、女子は、体操、競走、動作遊戯、忍耐、庭球、デッドボール、フットボール、バスケットボール、リレー・レースが行なわれた。大正七年、江沼郡で社会体育大会と称して催された会合には、神職団をはじめとして僧侶、銀行、医師、新聞記者、役場、税務署、会社、裁判所、工場、警察、郵便局、鉄道、郡役所など団体員五一〇人と共に教員一六〇人が参加した。また、他に先がけて臨海合宿や合同体操の公開なども実施している。能美郡教育支会では、小学校教員の体育奨励のため二十丁の長距離競走(大六)を行ない、九年には第一回小学校職員体育大会を開催、三五一人が参加して学校組合対抗の競走やボールカシリーズ、陸上競技を実施している。更に翌十年、加賀四郡聯合教員体育大会、社会体育大会(三五団体五五〇人参加)庭球大会を主催した。その時代を問わず、社会体育の目的がプログラムをとおして達成され、またプログラムの量的な側面、つまり、参加団体数が社会体育の評価指標であつて見れば、これらの行事は高く扱われて然るべきものであろう。鹿島郡は殊に熱心で、教員有志による体育クラブもの頃に誕生した。その講習会には著名の講師を招いて技を磨き、極東大会の見学で知識を吸収したり、一〇〇メートルのレコード競走や、和倉競馬場で青年団体育大会を開催して普及を計った。教員大会出場者の合宿練習を

機会に、研究に、トレーニングに研鑽を積んだ。こうした積極的活動は、直接児童や青年の指導にも及び、要目改正、県体育協会設立と呼応し、特に、県下初登場のスポーツ、バレーボールやバスケットボールでは大会で優位を占め、その普及の原動力となつた。当地区の校庭にこの種用具の見られぬ所はなかった程になり、クラブの貢献の一つと云われる。その他、神宮大会や近県への遠征競技も行ない、郡支会の体育部主催で、教員や児童、あるいは地域別の陸上、柔・剣道大会、相撲・庭・排・籠球大会、ダンス講習会など多彩な活動を行なつた。鳳至、珠洲、羽咋の能登地方もほぼ同様の事情であつた。

郡域の違った教員が一堂に集つてスポーツの大会を開いたのは前述の加賀四郡聯合教員体育大会が最初である。応援団と共に一〇〇余名の選手が参加し、十六種目に覇を競つた。初の聯合大会ではあつたが、郡教員大会その他の参加や開催の経験を持っている上に、周到な規約の下に行なわれ、内容もよく秩序立つた運営ぶりが記録されている。以後年々郡教育会の持廻りで開催され、参加も全県が対象となつていった。第三回には、競技種目にトラック、フィールド及び庭球があげられ、新しく鉄槌投、五種競技(ペンタスロン)が採択された(原文のまま)。会場設備を引受けた金石町は、職員児童の協力で運動場を従来の三倍、四五〇〇坪に拡張した。このため、大阪まで競技場の視察に出向したという。一市八郡一九六人の選手が入場式や宣誓を行ない、エビ茶、水色などのユニフォーム(背番号やアルファベット文字をつけた)が用いられ、女子は半袖上着、水色パンツ、白ストッキングを着ける者もあつたという。途中空絶はあつたが、昭和十年まで催された。この競技会は、一般社会のこの種計画の範となるよう諸般に心が配られ、師範学校生徒

が設備や審判に助勢した。この大会が近づくに各郡の校庭はその練習で賑わった。児童生徒、青年団などその影響も推測できる。

このように教員自身の競技会参加と共に、体育スポーツ発展の推進力と考えられる活動には、大会開催がある。その最たる例は、大正七年春、師範学校運動場（現在の泉中学）で行なわれた「石川県青年体育大会」であろう。従来、各種スポーツが、夫々構内のな合や対抗競技という小規模の形式で行なわれていたものを、陸上競技を主として、柔・剣道、相撲を含み、地域的にも初めて全県下を参加の対象とした競技会である。当時としては大掛りのもので、運動そのものの普及は言うまでもなく、競技態度、服装その他運営面についてもその後の社会体育に多大の好影響を齎らした。練兵場での宿泊には、当大会が「国民の元気の興奮に裨益する所多し」という見地から、第九師団は将兵を派して、一二五五人の選手に一切の便をはかる協力をした。競技は走・跳・投十三種目の外、忍耐競走、力持、ボール投、綱引、体操と柔・剣道などが二日に渡って競われた。来賓五二八人、頗る盛会。大会には競技服の貸与、記録の正確さに対する工夫など創意がはらわれた（石川教育一七〇号）。また結果について、市部と郡部に分けた観察で「一〇〇、二〇〇米競走や高跳、ローハードル、柔剣道の如き軽快と技巧とを要するものは市部がすぐれ、耐久力と力量とを要するものは郡部が秀でておる。これは体格と境遇との相違から来るものであり、同年輩の中等諸学校の競技に比べると著しく予習と研究とを欠除する憾があるようだ」と述べている。能美郡選手によってスパイクが初めて用いられたのもこの第二回大会であった。地方スポーツ史に残るこの大会も僅か四回で中止となったが、小学校教員体育大会を始め、その後相次いで催された地方競技会の範となり、今日の県民大会へも有形

無形のつながりと、さし響きを残している。県教育会は「国民体力は国力の基であるが、その陶冶は陸上に限られたものでなく水上においてもなすべきもの」として、陸上同様に大会を計画し、その第一回を大正九年、七尾郊外で開催した。立案、実施は鹿島郡支部が委嘱され、当地の小中学校男子全教員がこれに当たった。生徒、青年団員、教員二八〇人が、一〇〇、二二〇、八八〇ヤードの各競泳とボート、和船の競漕を行なった。明治以来の遊泳に始めて競泳が登場し、意義ある会合であった。その他十一年には、県青年剣道大会も行なわれ、また郡部でもスキー講習会が開かれたりした。

これら体育スポーツの会合は、それぞれ目的をもって行なわれている。例えば江沼郡の「体育尊重の念を養ひ、教員社会における体育気分の緊張を促進し、兼ねて一般民衆に対し規律節制等運動作法の模範を示さんとするにあり」という趣旨に見ても学校体育の推進は勿論、判然と一般の人々の体育の実践とその教導普及を意図していたのである。鳳至郡の教員体育大会規則「教員体育大会の特色」（石川教育二五四号）などよくそれを裏書きしている。「体育スポーツの振興は教員の手で」という自負と、それに対する研鑽努力を期して進んでいたことが伺えるのである。

(三) 研究活動 教育に関する研究発表や意見交換のためには当時いくつかの機会があった。その一つである県教育会は、会そのものの活動と共に毎年一回総会を開き、教育問題について懇談、討議をし、事業として前記のような体育会や講習会を開催したり「石川教育」誌を発刊している。会の調査部は適時、体育についても調査を行なったが、大正四年の「体育奨励に関する事項」はその一つである。即ち体育の効果を大ならしむため、教育者の履行する条項として、運動の種類、機会を多くすること、学校で養成した体育上の習

慣を卒業後も維持させること、身体検査の結果を体育上に利用することを挙げている。また「体操場の設備」を屋内外に分けて揭示しているが、要目公布と相俟ってこの機会に学校の体育施設が整備され始めたもののようである。そして担任学級の体操科を担任すること、放課時に児童と運動遊戯を共にすること、朝会体操、運動会には率先、運動の模範を示すなど体育上の修養を怠らないことが述べられている。このような履習条項から推して見てもその後の教員の体育活動は、ここにその規範が求められたのであろうことが察しられる。更に国民元気の振作、体力の増進を目的として開かれた体育奨励実行協議会の諸説であるという「体育奨励に関する実行二十二項」もまた、その後の体育活動についての道標になったに違いない。それは、身体に対する考え方、運動や選手のある方の反省、健康教育や給食、中央体育研究所の設置など、当時としては頗る広汎、進歩的な内容のものであった。総会では他の教育問題と共に数多くの体育関係の課題が検討された。そして、同様の形式による総会が各郡市支部毎にも催され、みづからの教授の参考とし、また他に裨益する所ともなったのである。こうした調査研究などは、その衝にあたった教師自身の活動ではあるが、更に多くの教師の学習指導の指針となったことであろう。「石川教育」(創刊明治三十一年)誌に掲載された実活動の報告や、体育スポーツに関する幾多の発表がそれを良く物語っている。この会誌は教員の最も手近かな参考物、発表機関で、大正八年頃二七〇部を配布している、もってその影響範囲が何えようというものである。大正年間の関係記事は一三編の多きを数える。殊に前述のような教育会主催の体育大会については、特集号扱いでその詳細が報告されている。会合の規則、記録、運動方法、反省など読者である県下教員は、これらの活動に

関心を持ち、その啓発に多くのものを学び、更に諸種の活動や、その地方の社会体育に生かされていったことであろう。

体育協会の設立についても、こうした誌上の啓発がその一役を負っていると考えられる。直接は、大正十三年来県された東宮殿下の本県結核予防についての御下問に端を発して誕生を見たのであるが、それ迄の気運醸成については、幾多の努力が積み重ねられてきたのである。即ち、奥原政次郎氏(二中)は、十二年に「体育協会設立の趣旨」の一文を掲げてその賛意を広く官民に求めている。また同誌六月号にも十数箇条の理由を付して協会設立を強く訴えた。内外の体育事情からも奨励の好機であること、など誠に時宜を保た洞察により、中央に体協の設立あれば県に体協のできるのは当然、急務であると述べている。同年催された県小学校教員体育大会の際、河北郡高松小学校の広瀬校長も、体育協会の存置を提案している。こうして十四年には創立を見たが、その一月に中学校長会で述べた知事訓示の中の体協設立についての内容には、奥原氏の発想と殆んど同様の理由が挙げられている。誌上のアピールがあつた力があったこと明かである。

運動の参加と相俟って、このような理論的研究、あるいはその発表活動の波及は大きい。更にそれが施設を作る因となり、また次のような常置的研究サクルを生み出して、そこでも活動が積み重ねられていった。十二年にできた金沢女子体操研究会、続いて生れた石川県体育研究会がその主なるものであろう。後者は、県下の小・中学校教員を主に今も継続しているが、当時は医師なども加わって規模も大きく諸種の競技会も開催している。学校の体育に端を発しているとは言え、社会体育への下地はこうして整えられて来たものと考えられる。

## 二、国の内外競技と県的事情

教育会主催や、教員の活動によって催された競技大会は以上のようであったが、そのほか、大正初期に始まってその後引続いて実施されている行事をあげると、大正二年の武徳会石川支部演武場祝賀演武大会(柔道、弓、薙刀)、第一回北陸関西連合野球大会、同庭球大会(四高)、その他学生、生徒の柔・剣道、相撲、庭球などがある。この時期は、国際的にも国内的にも社会情勢が目まぐるしく変りつつあった。学校体育は、教授要目公布後きわめて順調に発展し、スポーツではYMCAを通じてバスケットボール(大正三)、バレーボール(大正四)が紹介され、これまでに移入したスポーツは組織も整い全国大会を催すまでになった。即ち大正二年に極東選手権大会が始まり、オリンピック第七回大会には選手を送った。その国内予選には三六〇〇余名が参加したといわれるが、当時この地方の新聞としては、芝浦大会日々の記録が注意をひく程度のもので、国際競技会よりは、大相撲の役力士や犀川大橋の渡橋式、あるいはその頃出初めた女子の水着姿の写真の方が遙か珍らしく報道された。しかし乍ら、前記諸種のスポーツや県内大会を経験して、大正十年代に至ってスポーツの色彩も変り、昭和にかけての十数年の間の隆盛は実に華々しい展開であった。これまでの学生生徒のほか、職場や実業にある一般社会人の集りとか、女子のみの競技会が行なわれるようになって来た。大正八年、石川県庁員体育大会(上野練兵場)、十年に行なわれた県下実業団の庭球、野球大会、十三年の第一回北陸女子中学校庭球大会など、また少年野球大会、庭球、剣道、籠球の児童大会と小学校児童のみの競技会も催されるに至った。師範学校に「大球部」としてバスケットボールとバレーボ

ールを兼ねた運動部が置かれたのは十五年。最初の試合としてバスケットボールは、七尾中学、鹿島教員と(昭和二)、バレーボールは石川郡教員と行なっている。この年には石川県籃球(バスケットボールのこと)選手権大会が催され、その参加は小学校教員、軍人、学校など二十一チーム。これには滋賀、京都の両師範も含まれ、附属小学校屋内コート、同雨天教練場が使用された。バレーボールはこれより早く、大正初期、学校で六人制のローテート法で行なわれていたと聞く。教員体育大会に備えて、志加浦海岸で合宿練習をした羽咋郡の陸上チームが、練習の合間にコーチの長田博氏よりバレーボールを教わったのは十年前後であるともいう(西正吉氏談)。能美郡教員団が明治神宮大会に出場したのが大正十四年。昭和八年協会支部が出来たが、四年頃には能美郡、鹿島郡、錦華紡績、硬質陶器などにチームがあった。こうして出発した二つの球技は、十五年の改正体操教授要目にとりあげられたこと、北陸という土地柄室内で行なうに適しているゲームの特性もあって漸次普及した。

金沢スキー会の発会式は、大正十年大乘寺山で行なわれた。それ以前でも、学校では一本杖のスキーが用意され、素足で雪上を散歩する「雪こみ」と共に行なわれていた。能美郡鳥越村阿手で、第一回のスキー講習会が催されたのは大正十二年であるが、二十九名が参加し、高田師範原訓導が講師として迎えられた。昭和二年からは児童のスキー大会が大乘寺山で始められ、鶴来のほか新しく山中などにスキー場が設けられるようになった。金沢市スキー協会の誕生は四年、その頃は未だ稀にしか見かけられなかったスキーヤーも八

・九年頃には全山人という状態であったという（金沢市児童体育研究）。市内のスキー店の販売数調べは次のような数字を挙げているが、当時の事情が伺えよう。

年 度	大人用	小人用	計
昭和元年	五三〇	三五〇	八八〇
“ 八年	三七四〇	八三〇	一一九七〇

昭和二年には射撃、翌三年には乗馬の大会が開かれ、大正十年頃から羽咋郡宮永村などで実施されていたという卓球も神宮大会に出場するまでになり、昭和に入って卓球選手権大会を催すなど県の運動種目もその中を増してきた。

明治の終り頃から県外の競技会に参加しているものもあるが、大正に入ってはいよいよその機会が多くなった。即ちスポーツの組織化は競技会の参加範囲を広げ、また交通の発達は参加を容易にした。特に中・高生徒は、大学主催の柔・剣道、野球大会や武徳殿あるいは新聞社主催の全国的大会で活躍した。しかし、大正後期以降は、神宮大会や極東大会等の予選会、または各種スポーツ毎の選手権大会やその地区予選など県外で行なわれる競技数が漸増した。

こうして、この地方の体育スポーツも、わが国スポーツの発展に伴なって浸透、普及して行き、更にまた幾多の条件がそれに拍車をかけた。殊にその直接的推進力となったものは体育協会の創設であり、明治神宮大会をはじめ国内外競技会への参加という目標である。

#### 体育協会について

県内スポーツの普及、国の内外競技会開催、施設の新設及びこれ

らを裏付けする如き体育思潮など幾多の環境条件に、更に県内体育スポーツ関係の有志による啓発などもあり、東宮殿下御来県を機として大正十四年一月「財団法人啓記念体育協会」が誕生した。郡市及び個人の寄附など十万余円を基金として設立されたもので、会の骨子は次のようであった。

#### 一、事業の目的

体育の研究指導及び普及奨励

体育に関する講習及び講演会の開催

演武会、陸上競技会、水泳、短艇競漕、其他の体育会開催並

に其の助成

各種の公衆用体育に関する設備

前各項の外体育上必要なる事項

#### 一、会 員

名誉会員 特別会員 普通会員 賛助会員

#### 一、役 員

名誉会長（前田侯爵推戴）

理事一〇名（内会長一名県知事、副会長二名、常務理事三名

以上会長嘱託）

評議員若干名

このようにして発足した協会は、殆んど県の県内スポーツのため力を尽した。その詳細については、昭和二年を創刊号として年々発行していた「石川体育」に見ることができる。例えば昭和四年度実施事業概要では、講習会五回、競技会十九回を開催、研究調査事項四、講師派遣延七・一三回、地方体育助成五七〇円と優勝旗、賞牌など七〇五をおくり、海水浴場を開設したり、体育活動写真班を四八回も派遣、競技テストや、内容の水準も高い「石川体育」誌の発行（二〇

〇〇部）をし、その他体育の夕や十五の競技会の後援を行なっている。

#### 明治神宮大会

わが国のスポーツが国際的舞臺に進出し、国内のスポーツ組織も強化されるに至ったこの時期に、内務省が中心となって全国的な規模の体育スポーツの祭典である明治神宮競技大会が開かれるようになった。大正十三年、その第一回大会が新設の外苑競技場を中心に開催された。明治神宮祭（十一月三日）に結合し「運動競技を通して国民身体の鍛練と精神作興に資せん」としたこの大会は、国際オリンピックが国際競技の中心であるように国内的総合競技大会であり、正に社会体育の全国的な大会の発端でもある。種目の数、地方、中央の大会を通じての参加人員及び国民的関心の度において国内最大のものといえよう。従って当時の地方スポーツはこれに一層の刺激を受け、また地方スポーツの隆盛はこの大会を更に盛大なものとした。県では第一回大会に陸上、剣道、相撲に十四人の選手を送ったが、四高運動場で初めて行なわれた北陸三県予選の出場者は二一人であった。当時、この大会への出場は、競技者にとって一大榮譽であるとされた。新聞も四高運動会の寂れを伝える頃、この出場者に「郷土の選手」の見出しをつけている。

昭和に入ると文部省は、体育に関する審議機関として新しく体育運動審議会を設置（昭四）、体育運動主事會議と共に体育の合理的振興に努めた。ここでは「一般女子の体育運動奨励」、「地方体育運動振興」そして年を追って「社会体育振興」、「民衆体育普及向上」、「青少年体育運動の普及」などの問題解決がはかられた。最後に政治的、軍事的な圧力のあったことは否定できないとしても、こうして社会体育は漸次国の立場から振興されるようになった。ま

た「昭和の初めの十年間は対外、対内的に困難な問題の多かった時代であったにもかかわらず体育界においては、スポーツ・マニアの時代とも言われる程スポーツが華々しい展開を示し、記録的にも国際的水準に達した時代」であった。即ち、ラグビー、体操、レスリングを初め数多くの協会や連盟が次々と結成された。また社会人のスポーツでは、都市対抗野球大会などが催され、一般国民の保健運動としてラジオ体操が放送されるようになった、野球、水泳、ボートなどの中継放送もこの頃から行なわれ、国民のスポーツへの関心を高めていった。更に職業スポーツの野球団体が結成され、トップ・レベルのアマチュア・スポーツでも極東大会や国際オリンピックが回を重ね、わが国の水準もこれに近づくように成長していった。県内からも極東第八回の上海大会や、ロサンゼルス第十回オリンピック大会に入賞者を出し、その活躍が県スポーツ界に著しい刺激と関心呼び起させた。

#### 施設

競技会の参加及び一般の関心は、またその施設と相互的関連があるようで、県内の施設も漸次整えられるようになった。そして、更に巡ってスポーツの普及と発展に効果をもたらした。勿論、学校は正課必修上その設備が整備されるのは当然かも知れぬが、所々にコート、体育館、プールなどがつくられて行った。金石町町立運動場の開設を見たのは大正十二年であるが、二年後には金沢にも皇太子御成婚を紀して公設運動場（工費五八八九六円）が作られ、百間堀に庭球コートが新設された。昭和に入ってから、粟ヶ崎海水浴場が開かれ、松任に本格的な競技用プールが生まれた。続いて長田小、附属中、小松中などの学校に造られ出した。スキー場も鶴来、山中につづいて卯辰山に新設され、それぞれの季節の運動にも沿う

ように進んだ。金沢市の場合、昭和八年までに十九の学校に屋内体操場が新設され、種々の原因にもよるが、当時広く運動場を通しての教育に対する積極性が世に注目された。大正から昭和（戦前）に

### 三、戦争期の活動事情

かけて設立された県内の施設は、水・陸上競技場や球技場、格技場はじめ、幼児の遊び場まで四一六を数えるが、これは昭和三十五年調査の全運動施設（七八二）の五三％に当る。

満洲事変はこうしたスポーツ最盛の時に起り、昭和八年には国際連盟の脱退にまで進んだ。しかし、緊張感や活気こそあれ、国民の生活やスポーツ界に消極的な風が吹き込むことはなかった。神宮大会はいよいよ回を進めて国民スポーツの祭典となり、内容種目に発展を見乍ら東都の秋を飾った。一方、昭和十一年ベルリンのオリンピックには二四七人という多くの役員選手を送った。スポーツ界の内外交流も激しく、その頃来朝したスポーツ団体には、陸上競技のフインランド・米國、ラグビーのカナダ・蒙州・ニュージールランドを始め、水泳、水上ホッケー、籠球、庭球、野球チーム等があり、わが国からもスキー、水泳、陸上に選手団を海外に送り、はつらつたる賑いを示した。第十二回オリンピック東京大会が決定したのは昭和十一年七月。その他、新種目団体（ヨット、ハンドボール、自転車）の誕生や競技会などけんらんたる時期であった。学校教育においては、八年に高等学校、十年に青年学校の教授要目が公布され、大正十五年以来の改訂で、小・中学校教授内容が遊戯と共にスポーツの一層の重視となつてその普及実情が反映された。

当地方においても、こうした時勢の中にあつて内外での活躍を契機として、唯一のメディアである新聞がかなりのスペースをスポーツにさくようになり、一般の関心も頓にあがつて来た。第一回の県下陸上競技選手権大会が開催されたのは昭和十年六月である。日本

庭球協会巡回コーチ団が、デビス・カップの福田選手らを派して県で庭球の指導を行なつたのは翌十一年。この年、日本排球選手権大会で錦華紡績チームが優勝した。また条件に恵まれた登山も一層に盛んとなり、三三〇〇人が白山に登つている。

しかし乍ら、この頃よりようやく戦争の風が吹き初めるようになってきた。ベルリン大会出場後、交友国であるナチス・ドイツの影響をうけ、スポーツの指導理念も国家主義、全体主義に求め、健全娯楽としてのスポーツは次第に姿を変えて、心身の鍛練を極度に強調し、国防増進のスポーツへと進んだ。十二年、支那事変に拡大した戦争は、長期戦を避けがたい情勢となつた。教育審議会は、新しい学校制度を決め、教育も鍛練を重視する方針で、武道、相撲、水泳、スキー、薙刀、教練、登山、長距離走、日光浴、各種作業、臨海教育、体力調査などが計画されるに至つた。郡市の小学校でも合同体操や大行進、あるいは四五〇〇人もの六年生を合同して対抗戦を演じ、示威行進をして軍国意識を強調した（鹿島）。運動は素足、通学は下駄ばきの通達（金沢一三、六、二三）が出され、この年ついに東京オリンピックは返上に決まつた。昭和十四年厚生省は、国民体力向上の方策として体力章検定を実施、神宮競技大会はこの年より同省の所管となり、国民体育大会と改称、国防競技（後に戦場競技）、集団体操が入り、夏期大会は海洋、水上競技となつた。

十六年には全国的な行事は休止となり神宮大会が唯一のものとなった。この大会に県は一九〇人の選手を送っているが、同年内に催された一般の競技会を見ると次のようである。

#### 第十九回對抗陸上競技大会

#### 第六回北陸三県陸上競技對抗大会

#### 第二〇回青年団相撲大会

#### 第二回石川県民綜合体育大会

その他学生生徒のみの大会八種がある。戦時中とはいえ、従来の殆どスポーツはこのように続けられ、その競技はかように回を重ねて催されて来たのである。十二月には、県体協が主催して中学校の滑空指導者三十五名が、一中校庭で一週間の冬期訓練を行なっている。その目的を戦事的訓練においたグライダーの普及は全国的のものであった。この月、戦争は対米英に布告されるに至つていよいよ非常時体制に入り、発足した学徒体育振興会（会長、文相）が、

学校関係の体育訓練や運動競技を統一した。明治二十八年以来の伝統を持つ大日本武徳会は改組し、また、スポーツを旗印として進んで来た日本体育協会も、当面の急務である国民体位の向上を第一義とするに止むなく、昭和十七年体育団体の総合的統制体として大日本体育会に改組するに至った。学徒体育振興会もこの内部組織となった。こうして次々政府の外郭団体となつてスポーツの統制は否応なく進められた。石川県においてもそれぞれの支部が置かれ、その統一下にあって活動が続けた訳である。四月、学校鍛錬実践基準を制定、安宅町には滑空場やグライダー格納庫ができた。また、十八年九月、金沢市運動場で神宮大会予選並びに県民綜合鎮成大会が催された。国民学校男子や隣組の集団運動、能登部航空少年隊の滑空訓練を前後に、男子土襲運搬競走、障碍通過競走、手榴弾投擲突撃

の代表選手を決め、女子は運搬、縄跳などを行なつた。十月十日の北毎に「学生生徒の体育祭典から産業人、青少年団の鎮成大会に性格を変じた第十四回明治神宮国民体育大会は来る十一月一日より……」と記されている如く、神宮大会もその性格が本来のそれとは全く一変した。白山塾では北陸地区特別体育指導者鎮成会が開かれるし、動員体制は強化され、物資は不足し、旅行は制限され、戦場はいよいよ接近し、空襲で、競技会はこの年以後地方大会を残して開催が不可能になった。四高の野球部は廃止され、闘球（ラグビーのこと）が庭球に代つて初登場したが、実際は学生の動員で活動できなかつた。十九年、金沢一中外九校の生徒は愛知県下に学徒動員として派遣され、空襲の緊迫で金沢、小松、七尾三市の国民学校の授業は二十年に停止した。生徒、学生でさえもこの事情、社会体育活動は全く止り、凡てをあげて戦列に加つたのである。

悲しいことではあるが、我々はここに日本におけるスポーツの政治力、軍事力による支配の一つの形態を見るのである。



# 戦後の社会体育

## 一、県スポーツの再建、国民体育大会

明治の年代から大正・昭和とおよそ七十余年の間、運動界は様々な変転を重ね、いろいろな出来事を送り迎えた。国防スポーツの擡頭から試合の停止、更に未曾有の戦争へ、そして昭和二十年の敗戦となり、国史上未だ経験したことのない事態に遭遇した。この現実を前に、虚脱の状態にあった国民にやがて一つの進路―民主主義への道―が見出された。戦争を放棄した国で、新しい理論と方法を求め始めた体育とともに、抑圧され続けたスポーツも時代と共に動いた。食糧不足、施設の荒廃、用具の不十分等大きな障碍となったが、被占領下のわが国として先づ軍事色の払拭から出発しなければならなかった。十一月の「終戦に伴う体錬科教授要綱取扱に関する」通牒は、学校体育より戦事色を除く意図のものであるが、武道の授業休止、遊戯・スポーツ重視などが含まれていた。「学校校友会運動部の組織運営に関する」通達は一十一年に出され、スポーツ活動にとってはやや建設的な方向を示したもので、引続く「学校体育指導要綱」や野球統制令の廃止と、従来ともスポーツ活動の中心勢力をなしていた学園から、そのあけぼのは見出されていった。その頃の資材難は、復興に大きな障碍となっていたが、大日本体育会、文部省、商工省の折衝で、とくに生ゴム関係は、進駐軍の厚意で一定量が保証され、生産された運動具は各県に設置されている運動具配給委員の手により適正配給がなされるようになった。戦争敗北直後の秋の新聞は、スポーツらしいものは野球に興じる進駐軍の

写真や米リーグ位のもので、動員学徒の帰省、裸の帰還者、農作物を荒すもの、など概して暗い記事が多かった。が、厚生省のスポーツ奨励方策が発表されたり、子供ハイキングの会などが多勢の参加で行なわれるようになって明るさが増して来た。

十月、金沢医大の校庭で行なわれた石川県県式野球大会はおそらくスポーツ最初の催しであった。専売支局、日本冶金、映画連盟、松任工機、復員組、北国銀行、電機冶金、巨人クラブ、津田駒、若人クラブ、小松中OB、長組、石川製作の職場クラブの人々、それに学校など二十二のチームが参加して盛大であった。翌月の旧城廻周リレーは、一般団体九、学校七の三十三チーム一三二人が参加して行なわれた。また十一月一日、県体育協会は、兼六会館に各運動団体（北陸排球協会、護国弓道会、北国スキー・クラブ、奨健歩行会、県陸上競技連盟、北陸蹴球協会、石川卓球連盟、金城団、根上・鶴来・鳳南各体協）などの代表者を集めて、県下のスポーツ再建につき、県体育連盟の結成、競技場・会館の設立、各種大会開催などを協議した。戦時中畑と化していたそれぞれの運動場はもとより、市設の競技場も土木課と学董の勤勞奉仕で修復を急いだ。二十一年に行なわれた一般の競技会やスポーツ関係行事について見ると次のようなものがある（括弧内は主催、場所）

一、二〇 石川県スキー大会（北国毎日、卯辰山スキー場）

二、一六 “ 籠球大会（北国毎日、県一女、野町、高岡町

校)

三、一二 石川県野球協会発会式

三、一七 " 卓球大会(北国毎日、県一女)

三、一八 " スキー連盟創立

三、一九 " 排球協会創立

五、一二 金沢排球同好会大会(長田町校) 一四チーム

" 小松市芦城青年団分団対抗野球(芦城校) 一六チーム

六、八 七尾軟式野球大会(御校校) 一四チーム

六、九 小松青年団対抗籠球大会(芦城校) 八チーム

六、一〇 唐戸山相撲大会(羽咋町、唐戸山) 四一チーム

六、二三 石川県女子籠球大会(北国毎日、県一女) 七チーム

μ " 排球選手権大会(県排球協会、長町・四高)

" 石川県民(三地区)軟式庭球大会(県軟協協会、鐺基下、小松中、袖ヶ枝校)

六、三〇 第二回石川県陸上競技大会(北国毎日、県陸連、市設運動場)

七、二九 石川県水泳協会発会式

一一、一〇 第十回石川県県伝競走選手権大会(県陸連、北毎)

戦災を免かれた土地とはいえ、終戦直後の悪条件にも係らずこれ程各種の競技会が催されたということは、人々が如何にスポーツを好み、これを求めるかということが如実に示されている。こうして伝統ある、比較的復活態勢の整った団体は、戦前に引続いて競技会を催し活動しはじめた。政府外郭団体として戦時を過ごした大日本体育会は、日本体育協会に復帰、スポーツの普及と向上に努力するよ

うになった。往年の神宮体育大会に替るスポーツの国内総合大会として、この年から国民体育大会が開催されるようになり、県もこれに選手を送った。そして、県スポーツの再出発に一層大きな契機となり、機構再建への足場となったのは、金沢市を中心として催されたその第二回大会であらう。しかし、敗戦直後で、経済的にも精神的にも非力で整わぬ世情にあって、その開催は著しく困難であった。「国民体育大会の沿革」には「……当時は思想的に混乱した状態にあって動揺と対立の激しい時であったが、開会式には折から北陸地方行幸中の天皇陛下をお迎えし、戦後初めて仰いだ日の丸の旗に涙とともに祖国の姿を呼びさまされ、自ら信義と礼節が保たれ、いたわり励まし合うなごやかなふんいきの中に、温健中正な思想と秩序を尊ぶ風を育てた感激の大会であった。この大会は地方進出最初のものであって当時その施設と運営に払われた石川県ならびに関係各市の努力は、まことに驚くべきものであった。大会の機構も整備されて府県対抗の形がとられ、炬炎のマークが団体マークとして制定され、国体の歌として『若い力』が設定されるなど直しの大会として讃えられた体育大会であった。この成功が次回からの国体に対し全国各県がその誘致にしのぎを削る結果を招来した。競技種目は正式種目二十二、公開種目四で参加人員は一四、一六二人であった」と記されている。県からの出場者は、陸上、軟式庭球、籠球、排球、送球、卓球、自転車、体操、相撲の四二六人を含め総べて七四八人に達した。当時として、全国大会の開催は容易な努力ではなかったことが推察できるが、更にいくつかの新軌軸による運営は、以後の大会に益するところ大であった。また大業を遂行したその努力と成功による体育スポーツへの関心は、いくたのスポーツ団体と、整備された運動場(ラグビーの金沢高師師範学校、送球の金

— 147 —

沢青年師範学校、サッカー、ホッケーの第四高等学校、軟式庭球の七尾小丸山公園コート、その他屋内運動場など）を生み、その後の社会体育に大きな貢献となっている。この大会は回を重ねるに従って種目も増し、今日では夏季（水泳、ヨット、漕艇）、秋季（二七種別）、冬季（スキー、スケート）と季節別に従って競技を行ない、天皇、皇后両杯を府県対抗で競っている。トップ・レベルのスポーツ活動として各競技団体も力を注ぎ、協会も関係機関の協力に

## 二、協会とスポーツ団体の活動

よって連年選手（昭四一、二六五人）を送り続けている。その挙げ得た成果に消長はあるが、こうしたスポーツの大会は、その参加にこそ大きな意義を有するものであろう。選出母体の民力、その他の県勢からすれば、現在の成績はあるいは当然かも知れないが、いづれにしても大きな競技会で優位を占めるということは素質もさること乍ら多くの練習と研究の努力が積み重ねばならない。真のスポーツの望ましさもそこから生れ出る訳であろう。

県スポーツの、いわゆる機構の再組織については二、三年の歳月を要した。前述した大正十四年創立の体育協会は、終戦に当ってその基本金は満洲鉄道株式会社に投資していたため、資金凍結にあい運転不能となった。そして「二十余年にわたる多彩な歴史」（北毎、昭二三、三、五）を有してきたが、当時は「名目だけ存続している」（同二三、一、三〇）状態であった。昭和十七年誕生、二十一年改組した大日本体育会石川県支部が実際の仕事を進め、二十一年のスポーツ団体と十四郡市の協会を傘下にその殆んどの運営に当たってきた。当時、県のスポーツ団体を見ると（北国年鑑、昭二二）、石川県体育協会（県庁）、大日本体育会石川支部及び学徒体育振興会（北陸支部（金沢医科大学）、学徒体育振興会石川支部（県庁教育課）である。終戦後の日本スポーツ界は、いづこも悪条件の下にあり乍ら急激に復活の機運に向った。中央では、大日本体育会が民間の手に移され、文部省監督下にあった学生野球は日本学生野球協会のもとになど、各競技団体も一応民主化がはかられ、昭和二十二年度に至り体形だけは一通り戦前に復活された。翌年一月、スポーツの普

及と組織強化の必要から、また国民体育大会開催によって得た施設の活用のため、大日本体育会石川支部を発展的に解散し、行啓記念石川県体育協会もまたその幕を閉じ、あらたに石川県体育協会を結成して、二月、日本体育協会に加盟した。四月、元九師団被服庫を改造し、スポーツ会館と命名して、ここに民間団体としての協会事務所を置いて財団法人の認可を得る。規約によれば「体育運動を振興し、県民の体力の向上とスポーツ精神を養うこと」を目的とするこの会は、日本体育協会石川県支部としての仕事をもち、

体育運動の根本方針を審議確立すること

体育運動のアマチュア精神を確立すること

加盟団体の強化発展と相互の連絡融和を図ること

石川県体育大会及びその他の競技会を開催すること

国民体育大会県代表選手及び役員の選出派遣

体育運動施設の計画実施をすること

体育運動に関する資料の研究調査をすること

体育運動の宣伝啓発を図ること

体力向上に関する研究調査ならびに競技者の健康を管理すること

その他本会の目的達成に必要な事業を行うことになっている。現在休協に加盟している団体は陸上競技協会をはじめ、三十のスポーツ協会、連盟あるいは支部と高等学校体育連盟、中学校体育連盟及び七市八郡である。活動成果の盛衰は様々である。陸上競技では日独国際競技会、そしてバレーボール、ハンドボール、体操はそれぞれ全国的大会を開催し、また個人やチームのあるものは、国内外で目覚ましい活躍をして独自の発展を続け、また県民の体育やスポーツの実践について多くの関心を引き起すなど、その向上と普及に役立っている。一方、金沢に兼六園野球場、同テニス、バレーボールコートや小松・七尾の総合運動場が設けられ、最近では公営の体育館や数多くのプールなど、社会体育を主として考えられた施設も徐々に整えられた。その他、金沢市野町にローラースケート場が設けられ、栗ヶ崎に体育と観光のオリンピック博覧会（昭二六）が開かれ、更に三十二年には、NHK金沢TVの開局と、企業的スポーツや宣伝活動など、一般のスポーツへの関心に拍車がかけられてきた。協会としてはまた全国大会優秀者、社会体育功労者を表彰し、石川スポーツ章を定めて年々その功に報いている。今日の活動を「昭和四十一年度スケジュール」に見ると、一般のみの主要行事では、競技会一八九、練習会二三、講習会八、審査会、バッヂテスト等一九があげられている。このように四季を通じて沢山の競技が行なわれるが、そのうち総合的な催しを例示して活動状況を見よう。

石川県体育大会。この大会は、いわば一年間の県体育・スポーツの総決算とも云うべきもので、その端を大正初期に発している。内容、名称にいく多の変遷あって、名実とも今日のような大会になっ

た第一回は昭和二十四年に行なわれた。三十年から開催地に小松、七尾両市が加わって順番にその会場と運営一切を受持つようになった。例年七月八月頃、一部（六郡市以上参加のものが、男女別郡市対抗）、二部（高校対抗）、三部（オープン競技）の区分で行なわれる。四十一年の第十八回大会は七尾市で開かれ、十五郡市の一般社会人と、四十九の高校が参加し、男女一三〇〇〇人が二十六種目の競技を競った。

北陸三県総合競技大会。種目毎の三県大会は従来もあり、また今日続けているものもあるが、福井、石川、富山三県競技会は、その規定第二条にもあるように「三県民の体育向上と競技の水準を高め、併せて親睦を図ること」を目的として昭和二十九年より開催されている第十四回（昭四二）大会は、一般三二（女一一）種目、高校一八（女一一）種目が対抗の形で競われ、二七九二人が参加した。

己に理解できるように、各スポーツともかなり長期間に渡って多くの競技会が催されている。ここに考うべき問題もあるが、季節的に制約をうけるこの地方としては「競技の水準を高めること」は他に機会を求めるとして、せめてこの大会は、日頃試合や競技会に恵まれぬ人たちの出場を図って、その目的にもある親睦を図ることを主とし、むしろスポーツの愛好やその人口増加を指向することが適当であろうと思われる。それが、より相互の前進に役立ち、社会体育としても意味のあることになるのではなからうか。

社会体育の内容活動としてややトップ・レベルのスポーツについて述べ過ぎた嫌いがある。しかし、様々な問題に直面している地域社会、殊に集団的にも文化的にも崩壊してきているとまで言われる今日、人々を結びつけ得る唯一のものがスポーツであろうと考えら

れば、社会体育はこうした面にも大きな貢献をすることができないだらうか、と思われるからである。それにつけても、社会体育のプログラムは特別な人々のレベル・アップと共に一般の人々の普及という二つの働きをもち全体として考え合せなければならないであらう。

# スポーツ人口

県体育大会出場者やその予選会参加者を推察すれば、スポーツ普及の大概は察せられようが、各競技団体について見ると（昭和三八年一月現在）表のようである。いわゆる競技人口やその分布を知ることには容易でないが、三十七年末に行なった県内中学、高等学校の課外活動の調査によって中学校八十五校の運動クラブ員数を見ると一、四九九人で生徒総数の二五・八％に当る。また高校二十二校の運動クラブ員数は五、一五〇人で、生徒総数の二五・六％に相当する。もってその一般を推察することができようか。

団 体 名	創 設 加 盟	加 盟 員				推定人口
		一 般	(大 学)	(高 校)	(その他学 中)	
陸 上	21.10	712	25	389	1003	2200
水 上	21. 7.29	190	27	262	345	750
野 球	21. 3.12	225	チーム	409	1434	5000
庭 球	21. 3. 1	90	52	12	0	300
軟 庭	21. 5	30チーム	42	507	1148	3000
バスケットボー	21.12.24	500	50	429	1376	4000
ルハンドボール	21.12	7 チーム	1 チーム	129	53	600
ラ グ ビー	21.	4 チーム	23	116	0	250
蹴 球	22.	4 チーム	29	95	75	500
バレーボール	21. 3.19	600	75	599	2075	10000
バドミントン	23. 4	250	30	400	498	1300
ソフトボール	22.	2000	0	181	577	7000
ボ ク シ ン グ	21.	5	0	91	0	120
卓 球	2. 4. 1	53チーム	4 チーム	465	1503	2800
ス キー	21. 3.18	260	34	64	235	600
体 操	21.	5 チーム	20	83	227	370
相 撲	21.	120	0	98	122	350
自 転 車	20.12	6	8	11	58	300
漕 艇	26.	40	41	79	0	250
ヨ ッ ト	22.	5チーム, 11	37	20	0	150
山 岳	22. 4. 1	200	18	73	66	1000
弓 道	22. 4.	150	20	10	9	500
柔 道	24. 4	3500	102	318	436	3500
剣 道	28. 3	3000	31	199	354	2900
馬 術	23.10	25	27	23	0	100
ラ イ フ	23. 9	70	25	7	0	103
ク レー	30. 4	45	0	0	0	530

### 三、今日の社会体育

このように戦争後のスポーツ界は急速な発展をし、県内の活動も一層盛んになったが、その間一般を対象とした社会体育はどうであらうか。

#### (一) 指導する者、行事・活動など

社会体育は、学校の教育課程として行なわれる体育活動以外の、主として青少年及び成人の行なうレクリエーションやスポーツ活動と、教育という立場からみた呼び方であろう。即ち社会教育の一翼として行なわれる活動であって見れば、当然それは教育的な作用を営むものといえよう。これには無意図な教育作用と意図的な組織的なそれとがあるが、これまで述べてきた多くのものは、あるいは前者に当るものかも知れない。が、ここではいわゆる後者の社会体育について考えて見ることにしよう。そこでは、主体となる教育する側と学習する側、それに指導する内容、さらに施設が具備されねばならない。また、従って働きかける対象は多様であり、その点学校体育と違ってむづかしさがある。近代の生活は、都鄙に係らず「無数の集団のなかに生活の根拠をもつのが特徴である」と言われるように、人々はその住居にあって一つの集団に属し、職場について趣味嗜好などによりまた別の集団に連がりを持っている。スポーツでもレクリエーションでも本来はそれが自主的に行なわれることが最も望ましい姿である。しかし、このような今日の生活から、集団を対象として考えると、その自主的活動を促進するため人的・物的措置が講ぜられなければならない。集団は、働きかけが容易であること、活動実施の楽しさ、個人と社会に適応させていく人間関係の推進ということなどから重要な意味がある。また、前述もしたごと

く欠くことのできぬものは、運動施設であり、海や山などの自然の場所、幼児にとつては安全で魅力のある遊び場所である。さらに対象となる多くの人々が仕事を持っているのも、これと共に大切なのは自由になる時間、体育的な行事を持つこと、指導者をうること……などが考えられる。

運動を行なうことによって個人や社会を望ましい方向へむかわせる、その助力に役立てようとする営みが体育であれば、社会体育は一体どこがその働きかけをするのであろうか。戦前の社会体育は、主に厚生省体力局の所管であったが、戦後は占領軍、とくにC・I・Eの支配下に置かれ、スポーツやレクリエーションの指導がなされるようになった。二十一年八月、文部省は「社会体育実施に関する件」を発表し、国及び地方の社会体育行政の指針を示すとともに「社会体育実施の参考」を作成配布して、その健全な発達と普及に力を注いだ。二十二年には一般の生活に潤いを与えるのに役立つスポーツやレクリエーションを国民の間に普及、振興しようと、日本レクリエーション協会が結成され、その指導者養成に努力するようになった。その第一回大会が金沢市で催された。二十四年には、社会体育に関する行政の根拠となつている社会教育法が制定された。これによつていわゆる社会体育、レクリエーションが、社会教育の一環として初めて法的に位置づけられ、社会教育行政の一つとして推進されることになった。国は地方公共団体の基本的な任務として「環境を醸成」することを求め、これから県市町村教育委員会の社会体育についての行政事例が詳細に示された。かくして、社会体育に関する行政事務を処理遂行してゆく専門的教育職員が置かれた。

そして「体育およびレクリエーション」を専門とする者がこの職に就任して「社会体育を行なうものに専門的・技術的な助言と指導を行なう」ことになった。こうして社会教育関係者やその団体あるいは公民館の事業として採りあげられるに至り、漸次社会体育という言葉がスポーツと異なった概念のもとにおかれるに至った。実際機構として社会体育を側面的に助長するものは、県市教育委員会の保健体育課、社会教育課などの体育関係のかりである。永い間積みあげられて来たスポーツ活動を土台として、漸次社会体育としての活動が始められ、費用、施設、指導の態勢などもこれに沿うて整備が考えられるようになった。

## 指導者

地域における社会体育が活発になるに従って指導者不足が問題となった。前記の通牒や、社会教育法の制定を契機として、県教委では青年団、婦人会に呼びかけて、体育レクリエーションの巡回講習会を行なった。しかし、指導者がなく、無組織のため継続的な普及を望むことができず、多くの人々の要望にも応じられなかった。昭和二十五年教委の地方出張所、郡市体協、公民館、青年団、婦人会等に指導員の推薦を依頼し、そこで選ばれた人々を「社会体育およびレクリエーション指導員」の名称で委嘱することにした。こうして指導員九〇人が始めて誕生、その確保と資質の向上のため春秋に講習会を開き、また婦人層の要望にこたえて県下八会場で講習をした（二〇〇八人参加）。ラジオ体操やスポーツバッヂテストについても会を催し、判定員一二二六人を養成、さらに教委のすすめで郡市単位で研修会が行なわれた。その結果は、レクリエーションの必要性理解、グループの結成、盆踊りなどの普及となった（昭二七、教育要覧）。翌二十六年三月「社会体育指導要項」が発表された

が、これは国民体育推進のための基本方針を示したものとして注目された。県におけるその後数年間の社会体育状況については「……指導網の確立、公民館、婦人会、青年団への普及と友好関係の育成、サークルの育成、婦人層を通じて家庭レクリエーションの素地作り、公民館での予算化」（昭三二）「社会体育・レクリエーション指導員の現況」によって伺うことができる。三十二年文部省の奨励で全国市町村に「体育指導員」が設けられた。名誉職的な位置、または非常勤の立場ではあったが、制度的に位置づけられたことは、わが国社会体育の歴史的、画期的なことであった。これが法的根拠を持つようになったのは、昭和三十六年「スポーツ振興法」が制定されてからで、県における指導員は現在三九三名（教員一三四、公務員九六、自営八六、会社、団体従業員五八一女子三七）である。昨四十一年度の活動例として七尾市の場合、公民館の運動行事指導員九、大会五、その他研修会、他県指導員との交換があげられている。また、対象を一般婦人、女子工員、給食調理員、教職員にとつて、スポーツ調査を行ない、余暇活動の現況、プログラム、疲労などをみている。羽咋郡志賀町の場合は、重量挙げの講習とその競技二七、大会指導員九、スポーツ教室七があり、その参加者は四、八七六人と報告されている。指導員はその七五%が三十九才以下であるが、職業との両立にむづかしさがあるようである。

スポーツ振興法は、スポーツ施設の整備充実、団体の育成、指導者の養成などを盛込んだ法令で、体育・スポーツ関係者はいうまでもなく国民の久しく要望していたものである。以後、社会体育は、先に制定された社会教育法とこのスポーツ振興法に基づいてすすめられるようになったのである。現在、県においては七公共団体（六二人）がスポーツ振興審議会を置き、市町村の教育委員会に体育指

導委員が設置され、公共施設というまでもなく学校施設の利用も認められるようになり、地域の運動会、競技会、スポーツテスト、スポーツ教室などの各種行事を実施すると共に、社会教育諸団体と連絡を保ち乍ら活動を展開している。昭和四十年年度の社会体育関係の事業内容を見ると次のようである。即ち、体育指導委員講習会をはじめ、青少年スポーツ活動登山指導者、レクリエーション指導者、スポーツ教室指導者、スポーツテスト、ユースホステルリーダー及び全国指導者の講習会を行なっており、勤労青少年春秋の集い、モデル・キャンプや北陸三県サイクリング・ラリー、県レクリエーション大会の開催（二、八六五人参加）、また前述したような諸種の大会、競技会、関係団体など十二のものに補助金を出して協力をしている。更に年々社会体育、レクリエーション優良団体と社会体育功労者の表彰を行なつてこの道のための奨励としてゐる。

このうち、社会体育の活動推進を示すもの一つとして特にあげると、昭和三十四年から実施している青少年スポーツ活動指定市町村の指定がある。これは、地方のスポーツ活動についてモデルとなる所を選び、経費の一部を補助し、継続的な計画・実施を助けて振興をはかる目的で始めたものである。国の指定をうけたところは、三十四年の金沢市、富来町をはじめ四十一年までに十八、県の指定をうけたものは三十四年の加賀市（バスケットボール、陸上競技）ほか十一にはじまり、二年の継続指定で四十一年までに三十三市町村が指定を受けている。これらのものは、従来その運動に熱心なところ、土地柄特別スポーツを行ない易い条件の所、新しく試みようという地域である（三十五年度の詳細は朝日新聞に掲載）。市部の場合はそれ程でもないが、一般に農村では未だスポーツ活動の条件

に恵まれてはいない。しかし乍ら、公的な社会体育の推進では、一見それが非常に進んでいるように見られる場合がある。国や県の指定をうけたり、その地の教育委員会や公民館に熱心な指導者が現われたりすると、いわゆる上からの指導によって表面的にはかなり活発な活動が展開される。働く時間に区切りのないことや古くから残っている共同的規制などの条件で、往々「全村あげてのスポーツ活動」という現象が生じる。しかし、このような現象は、多くの場合永續性を持たない。指導者が代つたり、指定が解かれたりすると、元の状態に戻つてしまふケースが多い。社会体育の組織やグループにしてもそれを支える人々がいないと、やがて形骸化させてううか、消滅に至る。農村の体育が上からの働きかけによつていかに左右され易いかを示していると同時に、その条件を持たない所でスポーツを振興させることのむづかしさを思わせる。

更により小さな自治体における社会体育及びレクリエーション活動を、金沢市に例をかりて見ることにする。教育委員会制度が布かれて（昭二七）後、社会教育課（体育係）は市民の体育、野外活動の普及、青少年のスポーツ活動、社会体育団体の育成、施設やその管理を担当するようになった。昭和四十年年度の活動には「町ぐるみのスポーツ」とした（昭二七）バレーボールをはじめ、登山、水泳、スキーなど七種目のスポーツ教室を開設、講習会二、青年学級ソフトボール、家庭婦人バレーボール、親子ハイキングなど、交歓会、集いといったレクリエーション活動十回、体育大会など六回がある。これに参加した人員は二一、四三二人である。殊にバレーボールについては、ボールを配給し、手引書を作り、公民館、職場では練習会（四五館一、八〇七回、三九、五一六名参加）を持ち、チームを作つて（六六職場、七八チーム）協力している。施設として



も簡易コート五ヶ所、夜間コート三面を小学校内に設けている。また十四種類のスポーツ団体を傘下に持つ市体育協会は、種目別の選手権大会や技術指導の講習会を開催して普及と向上に努めている。これら市民体育の奨励として約四、一四六、〇〇〇円がつかわれている。

これまでの記述でも察せられるように、種々の行事やいろいろな働きかけは、社会体育の主となる推進が、そうした大会や活動を通して漸次、同好者が集ってクラブを作ったり、集団化してゆく方向を望ましいとして目指しているからなされるのである。対象についての組織化は容易ではないが、上述したように、学習の効果を期待すればそれは大切な事柄である。「教育する側」の人々は、既存の組織に働きかけ、その集団を足場として「学習する側」の組織づくりを進めるよう努力する訳である。そのような集団としては、家庭教育に関係のある集団、青少年教育に関係のある集団、勤労青少年に関係のある集団、あるいは職場のスポーツ集団などがあげられる。金沢市の例でも分るように、婦人会、青年団、PTA、町内会などの地域組織を中心に行なっている。行事の企画、啓蒙、施設の整備あるいは中核となる幾人かの者があり、また育てられたりしてそこにコアができて徐々に育って行っている。一方機能的な面から考えると運動そのものを目的とするグループがある。これはグループを作って施設を探すものもあるが、市部の場合は特に施設を中心に集めるものが多いようである。今後はこれらのグループの生まれる社会的条件は一層整うし、また、欲求と実状は先に進んでいるが、施設管理側にも利用者にもまだ考うべき問題があるようである。

更に直接の活動機関である公民館に例をとってその事情を見よう。

社会教育法でその設置が奨励され、二十七年には県下全市町村に公民館が設けられた。県教委規則の「公民館設置に関する細則」によれば、事業としては教養、図書、産業、集会所などが含まれている。昭和四十年（二四八館）における備えつけの体育・レクリエーション用具として、球技、陸上競技、野外、柔剣道など一、六四九点があげられている（昭四一石川県社会教育の現状）。金沢市地区公民館の開催した関係行事を見ると、一、九七二回、参加人員二〇、九七七人（昭四一、教育要覧）となっている。活動内容は備品からも伺えるように県のそれとほぼ類似のもので、一日から十数日以上にわたる種類のものである。

ここでプログラムについて見ると、レクリエーション的行事や競技的行事が多く、学習的、教育的行事が少ない。しかし、人々の運動やスポーツに対する欲求は様々であるので、それらの欲求に従って多くのプログラムが用意され、容易に健全な形で行なわれ、これらの機会を通して正しいスポーツのあり方を身につけて、これを日常化する態度を育てることが望ましいのである。更にこれらのものは、一日だけでも価値はあるが、折々に行なわれることに意味がある。「継続は力」といわれるように carry-over value が考えられなければならない。青年団の活動内容のうち「団員の参加率の多いのは体育、レクリエーションを中心とした活動」で、文化、学習、社会、産業、生活活動を上廻っているという（昭四一、石川県社会教育の現状）。しかし、学級講座では体育、レクリエーションそのものを、あるいは健康や体力を問題とするのではなく、多くは学習を引きつける役割だけを負わせているように聞く。簡単な運動をとり入れることによって学級や講座に参加する楽しみがふえ、参加者相互の人間関係ができるだけ早く深まる媒介となることを期待してい

る。しかし、青年学級などの場合、学習課目の参加が次第に減り、終にはレクリエーションやスポーツクラブ活動に出席者が集まるといふ現象が多いという。スポーツを餌にして学習に引きつけていくということとは、必ずしも間違いではないかも知れぬが、むしろ、スポーツそのものを追求するなかでこそ学習も生まれてくるのではないだろうか。そこでは、スポーツを要求している青年の労働と生活の環境、スポーツを十分に出来ない地域や施設の条件、「見る、読むスポーツ」の世界と青年の世界との格差と断絶、そこからくる矛盾そのものこそ学習の内容であり、実は認識の契機となる重要な糸口であるから。つまり、スポーツを導入として採用することは、それがあるからやって来るというように理解せず、むしろ、スポーツを入口にして学習を集団化する意図を持つならば、スポーツを実施し乍ら、そしてそのものをこそ問題にしていくことである。企図者自体の問題かも知れない。また、機構的な分離があるとはいへ、青年学級、婦人学級、教室あるいは研究会、開設講座などを見て、社会体育に関するテーマは誠に寥々たるものである。それを扱うセクシヨンは異なるにしても体育・レクリエーションの社会教育学習内容が「一般教養」「生活技術」「職業技術」とともにあるかぎり、同様の学習の場で考えられることが多くの人々にとって大切ではないであらうか。

## 職場クラブ

経済的な利潤を求めるのが本来の機能である職場は、労働力を得る一間接的な給与でもあることと労使の関係ををはかる経営者の立場、そして健康管理や体力保持など従業員の立場から、そのスポーツはいよいよ大切なものとなってきている。昭和三十五年の調査（村本、伊藤、桜井ら）では、県下の事業場数三五、三九〇（従業員

九三、四八六八）のうち四十一職場について有するクラブ数を見ると次のようであった。卓球三九、バレーボール三五、野球三〇、バドミントン二〇、庭球一五、ソフトボール一四、陸上一二、水泳七、登山、相撲、柔剣道五、体操四、バスケットボール、スキー三、サッカー、ボート、その他一。これは、四十一年の調査（木村「金沢周辺における職場体育の実態」）においても、ほぼ同様の傾向で、殊に機械、繊維関係は整備されてきている。種目別組織率（クラブ数を対象数で除す）を比較して見ると次のように、対象職種

	野 球	卓 球	バレーボール	バドミントン	ソフトボール	庭 球
三三年	80%	95	85	48	34	36
四一年	79%	48.6	45.8	4.2	30.6	10

が若干異るとはいえ十年間に増しているとは考えられない。繊維、機械、建設、金融、運輸、その他七十三社の調査であるが、設備はバレーボール、グラウンド、庭球コート、卓球が多く、用具は五〇%以上のところが用意している。しかし設備の殆んどないものが三二%あると述べている。クラブ加入率は、一社平均一五・九%で、日本体協の調査による一三・六%よりは稍高いが、愛好者七四・四%に較べると著しく低い。前者の調査で「何か運動を行なっているか否か」の質問に対し、四八五人のうち男子六〇%、女子五〇%がやっていると答えている。運動していない者の理由としては「する暇がない」が四五%（四一年は三四%）、「場所がない」がこれとほぼ同数、その他の理由は、用具、指導者がいないことなどがあげられている。また労働時間、休憩時間では、規模の小さな事業所ほど僅少であり、運動に用いる時間も少ないことが察しられる。昭和三十

五年の調査（金沢労働基準局）では、金沢市、河北郡、石川郡の三、五九八事業場のうち完全週休制が三〇％であったが、今日では殆んどが週休制となり、自由時間も約一時間増しているという。

それにしても「運動したい」と答えているものが、二五三人中一五二人を占めていることを併せ見ると、時間と共に活動を阻害している施設の増加が考えられなければならない。将来は職場の体育活動が、その理解の深まりとともに社会体育の一つの拠点となることが予測されるので一層である。

居所、職場に関係なく同好のものが相集つて楽しむレクリエーション団体がある。これまでのものは主としてその機能の一部としてスポーツやレクリエーション活動を行なう機会を持てるような集団であるが、これらは、それを目的としてつくられた集団といえるであろう。即ち九つのグループから成っている石川県サイクリング協会をはじめ、県ユースホステル協会、ドライブクラブ、山岳会、金沢レクリエーション協会、そして実施毎に参加者の新たな北鉄レクリエーションクラブなどがあり、夫々活動が続けている。スポーツ人口の増加は、今後このような私的な組織の発生を促すと考えられるが、殊に市部などこれらを含めた統一的组织をつくるなど、活動組織の育成強化が考えられるべきであろう。

また、世論調査によると、五八％の人が「全然スポーツ活動はやらない」し、その半数以上の人は「したくてもできない」と答えている。ここに今日における組織的な社会体育の意義があるといえよう。もともと、レクリエーションの多くの種目は本質的には個人的活動であり、家庭や地域社会で自発的にその要求を満していた。がパトラーも言うように、近代社会の発展、特に都市への人口の集中といった現象は、多くのレクリエーションを外部の機関や団体の手

に委ねることを余儀なくさせている。しかし乍ら、事實は組織的な社会体育は、量的にも質的にも十分ではなく、地域社会や職場でかなり行なわれていても、従来の選手中心のプログラムで大多数の者はその恩恵から取り残されている。さりとて施設の不足は、インフォーマルな活動に向うこともできず、徒らに商業的施設の繁栄を促すか、手近かな室内娯楽に向かう結果になる。ここに組織的な社会体育を今後一層進める要が生じる。しかも一方、地域社会における運動やスポーツ活動の中で、現在大部分を占めているのは組織中心の活動より、施設に見られる活動や非組織的な活動であるといつてよい。殊に、最近の野外活動の一般化は、非組織的な活動の占めるウエイトを大きくしているし、また、家庭体育や子供の遊びのようにそれがそれなりに活動としての意味がある。従つて、要は組織的活動の充実と共に、非組織的な活動への配慮も忘れず、両者の有機的連関を図り、その調和的發展を考えるとということであろうか。

#### （三）施設、費用

わが国の社会体育関係の予算は、昭和二十四年の五、八〇八、〇〇〇円から昭和四〇年の一二、七八〇、〇〇〇円に増加し、特に、社会体育振興のための国の施策として、昭和三十年度より青少年野外活動助成、三十二年度よりは地方スポーツ振興助成（体育指導員活動）、三十四年度は青少年スポーツ活動振興特別助成、あるいは国民体育施設建設補助が実施されるようになった。

石川県における社会体育費について見ると、昭和四十一年度は二、八五四、〇〇〇円が使われている。主なる内訳項目は、体育指導員育成、青少年スポーツ活動指導者講習会、青少年スポーツ活動特別振興、スポーツテスト普及振興、スポーツ技術講習会費などである。そのほか、水泳プール建設、国民体育大会派遣、県体育大

会開催、スポーツ振興費など二十二項目にそれぞれ五万乃至四百万円計一二、六七一、〇〇〇円の補助金が出ている。また、健民運動関係として公営海水浴場、教育キャンプ地、運動場夜間照明整備の補助、健康増進運動、スポーツ振興運動事業費として別に約二七〇万円が支出されている。

活動の基礎的条件の一つである施設については地方公共団体が管理するもの、民間の営利を目的とするものなどがあるが、それらのうち県内で使用されているものは次のようである（昭四二）。

陸上競技場	六	野球場	七
庭球場	四五	バレーボール場	四〇
体育館	三	スキー場	六
スケート場	一	キャンプ場	二八
海水浴場	二七	貸しポート場	一四
バッチینگ練習場	一一	水泳プール	二〇
柔道場	一	剣道場	一
弓道場	三	相撲場	三
馬術場	二	ゴルフ場	二
ゴルフ練習場	一二	射撃場	二
漕艇場	一	ボーリング場	四
子供遊び場	六九		

このほか、国の補助による施設として青年の家二、国民宿舎三、ユースホステル一六、勤労青少年ホーム二、公園一があり、県教委指定の青少年宿泊所一七がある。【ついでに学校の施設をあげると、五九九校（小・中・高）のうち四五六校が体育館を有し（全国一二位）八四校がプール（同二二位）、一八校が柔・剣道場を設けている（同七位）。また、屋外運動場の広さは、一人当り一四・一平方

メートル（全国二二位）である。

これらの施設について一般者の利用状況を見る。金沢市営競技場の場合（昭四〇）、四月―十月で二・二九九人、県営体育館三、二〇〇人、兼六園コートは二、五八九人、また金沢市営の五プールは、延二六五日で二一、四五九人（高校生も含む）、兼六園野球場は一五九件となっている。青年の家宿泊者金沢の場合は（昭四〇、四、一四一・三、三一）九、〇〇三人、その他婦二〇、九四二人である。しかし、これはユースホステルとの協定宿泊所であるため、青年団の日常活動には利用されておらず、この点青年のための「青年の家」が要望される。海水浴場昭和四十一年の利用者は十七ヶ所で約一〇七万五千人と報ぜられている（八、二二、北国新聞）。ポートで遊ぶ者も多く一業者当り平均一三万円の収入があった（昭三五、金沢国税局）。教委が指定している七ヶ所の教育キャンプ場の利用者は、男子一一、二九六人、女子五、二八六人である（昭四〇）。白山登山者は八月十七日現在（昭四二）で一三、七二五人が数えられている。また当地方は、冬の長い故もあってか、春秋には学校運動場は勿論、児童公園、郊外の山野、あるいは海岸などで規模、大小様々の運動会が開かれるのが特色である。その一例として、卯辰山公園における四十一年春秋のそれは七十四回が数えられ、雨の日曜が多く中止されたにも係らず一七、七四〇人であるという。その盛況さが伺える。世論調査による「種目別スポーツ実施状況及び今後やりたい種目割合」では、一年内に実施した割合のうち野外活動が二七・七〇％で二位、そして四〇・二％が今後やりたい種目として一位を占めているという。このような数字にも、その一端が伺えるように、最近のスポーツ活動として野外への志向が高まってきていることである。前述の県や市、公民館のプログラムを

見てもこれが取りあげられてはいるが、これら野外活動施設の整備は、伝統的スポーツのその比ではないのである。根本的には国や県・市において何らかの対策が考慮されねばならないが、キャンプ地や海浜の整備等地域社会においてできる範囲のものに整備の必要があるのではないだろうか。

国民のスポーツに対する態度について「スポーツに関する世論調査」(総理府)によると「スポーツが好き」なものの昭和三十二年度は三五%であったが、四〇年では六四%と増している。一般に高い関心を示しているということができるが、その参加については未だ恵まれた一部の人たちのようである。また、青少年の好んで読む新聞記事でスポーツが四一・九%と一位、週刊誌では一五・六%で二位、ラジオ番組では一〇%三位、テレビ番組では一二・二%で六位となっている。スポーツに関する限り、その実践に意義があることは勿論であるが、このような数字からすると、行なうスポーツより見るスポーツといわれるように、単にそれが安易であるからとばかりは考えられない。欲求とその実現の阻害―施設不足―がこうした傾向に向わせてはいないだろうか。

さらに営業的なものについて見ると、手取遊園地の入園者は一一三、八九〇人(昭三一、北鉄調査)、金沢市内二百貨店の屋上娯楽施設利用者は一三、七二一人(昭三三)である。ボーリング場四ヶ所の一ヶ月入場者は二〇、一一五人(昭四一、一二)、ゴルフ場、一ヶ所平均二、〇八六、同練習場、一ヶ所当り平均一一九、〇〇五人(昭四二、三調)である。スケート場は、一般及びその団体七二、一八九人、学生、児童とその団体七二、〇六七人(四一年度)となっている。

この地方では温泉にめぐまれ、その地勢として南北が山と海には

さまれており、多くの変化に富んだ地形やそこに設けられた施設から好適なレクリエーションを楽しむことができる。屋外を使ってするスポーツ的なもの、屋内における娯楽観光をかねて保養の意味をもつ、よりレクリエーションナルの面、いつて見ればそれらは人々の健康と体力の増進に関係があり、社会体育の分野といえるであろう。景勝地、公園、老木の名勝といわれるものは、山岳四、高原一、溪谷三、河川五、湖沼五、海浜一五、湾二、島二、砂丘一、公園十二、花と木十三が挙げられる。このような多くの資源をもつこの地方の観光客は、主として県外からであるが、昭和四十年は金沢地域では二五八万五千人、加賀白山地域四二万四千人、能登地域は一、二六万九千人であるという(県経済部調査)。また手近かな例として、金沢市及びその周辺に居住する者と考えられる卯辰山公園の利用者は、昭和四十年、一、〇六五、〇五五人(同所の施設、少年の家、ユースホステルなどを含む、公園事務所調査)である。いわゆる社会体育からは海山と対蹠的に考えられる室内の娯楽については、昭和三十三年の撞球、金沢市五軒(昭四二、三、六軒)の営業で一日平均一八〇人、年間五一、八四〇人となっている。ダンスは、金沢市内に三軒あり、一日全店で約一八〇人、年間の延利用者四八、九七八人(四〇年度八、仮設一六四、延一〇、三一五人)。麻雀をもあげて見ると金沢市内に四十五軒(昭四二、三、七〇軒)一日平均四、〇八〇人、約年一、一七五、〇四〇人となる。パチンコは二三軒(昭四二、三、一〇七軒)で全店一日の利用者数は、平均一四、二五〇人、年間延人数は約四、三六〇、五〇〇人である。序でにあげると射的場八、スマートボール場一四、モーターボート遊覧船二二で、延一六、三八一人となっている。

現代の社会生活は、構造と場所と時間からだけでは十分説明の

きないものがある。日常、家庭、職場、団体とつながりを求めて生活しているが、それ以外に単なる大衆としての社会がある。この状態には、特別目的を持つものとしてでないものがあるが、たしかにこれも近代生活の一つであろう。そして、社会体育の一部を受持つレクリエーション——広い意味にとれば、体育技術を含めた生活力の再生運動——と極めて関係深い。ただぶらりとした状態、あるいは球場や映画館におけるお客という身分の状態である。このような状態にあつては、スポーツやレクリエーションの団体に加つて生活を楽しむとは違つて、催しや行事を見たり、味つたりして、いわば間接的にレクリエーションな効果をあげられるからである。スポーツのアマチュアリズムとか、娯楽のレクリエーションなものは、十分な商業的価値をもつて社会の関心を集めているのは、それを支えるものとしてこのようなわれわれの生活があるからと言わねばならない。ここではしかし、映画やスポーツの観覧者などについては省略する。

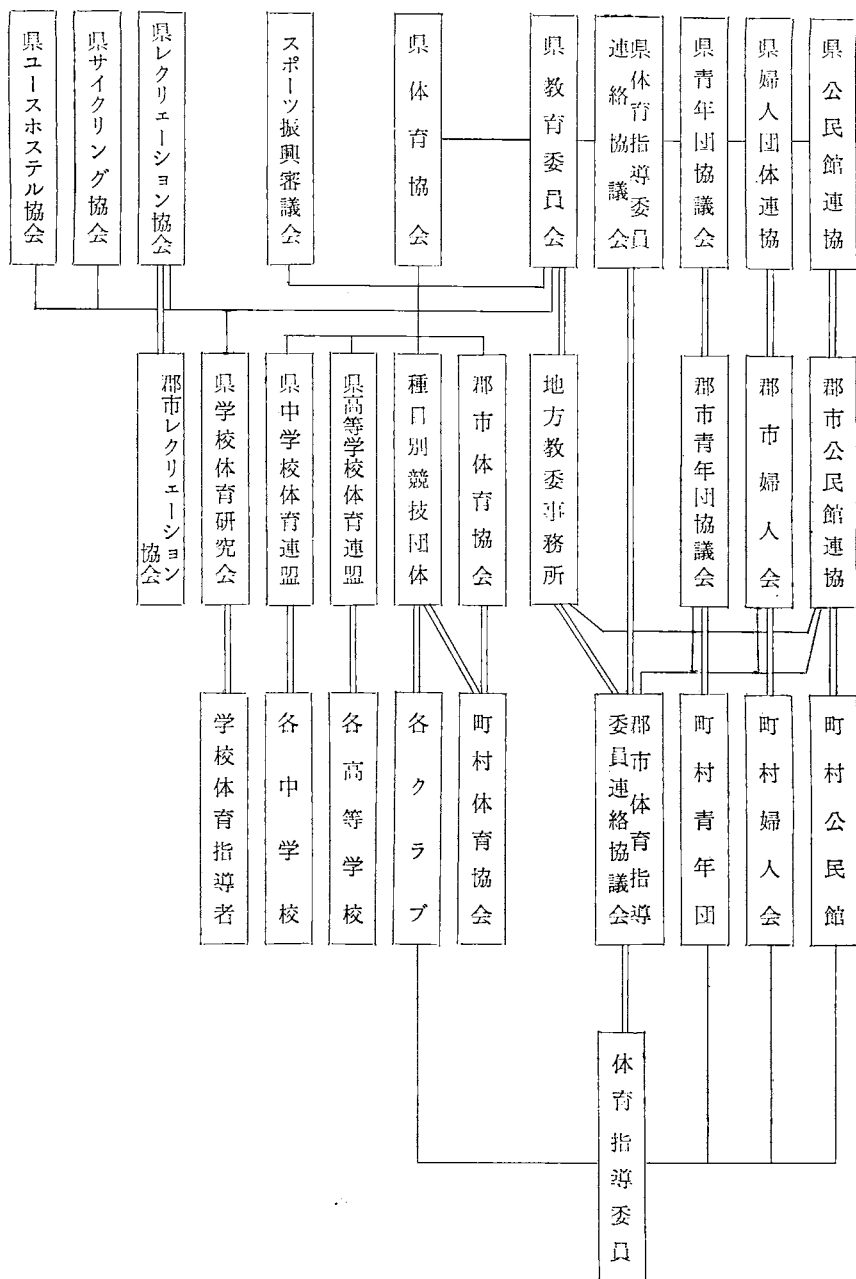
ある社会学者は、個々の行なう自由な運動やレクリエーションは、職業との関係で選ばれることが適当であるとして、種目選択における両者の関係は、室内——屋外、知的——身体的、腰かける——立つ、個人——集团的、都市的——農村的などの如く、相互に対照的に相補うものがよいと述べている。種々の条件で、誰でもがすぐそこまでは手が届かぬとしても、たとえば、野町小学校の調査（昭三五、三年——五年）が示す五〇〇人の一三%が大人の麻雀を止めて貰いたいと考えているように、この地方では室内娯楽が求められ過ぎている傾向がある。スポーツにしても雨雪によるあきらめが強いせいか、体育館の普及の故か、屋外の活動、殊に広い運動場での奮闘的ゲームに

は関心が薄いようである。また、古くからの伝統もあつて、集団としての積極的な社会体育については、関係機関の手が届いているようであるが、折角めぐまれた海や山野に活動を求める多数の人々に對する施設、地方開発における社会資源としての体育、スポーツ施設への配慮が不足しているように思われる。

### （二）組 織

こうした多方面のスポーツやレクリエーション活動と、その促進の機会とは、県社会体育発展の方向を示し、間口をいよいよ広めつつあることを意味するものであらう。体育・スポーツの県内関係組織を图示して見ると凡そ次のようである。

しかし、組織図の上では一見完備しているように見えても、例えば指導の組織と活動の組織の連繋、あるいは地域組織はよくても、ここには職場組織がなく、それとのつながりはない。全住民のための社会体育をはかるためには、組織の形骸化を心しなければならぬ。現在、社会体育においては組織論は、特に重要視され、そのあり方についての検討の必要性が説かれているが、スポーツ振興の法論としての理由がその一つである。その背景として、スポーツ人口の拡大に伴う大衆のスポーツ組織をどのようにすればよいか、という新しい問題をあげることができる。つまり、特定の人々によって支えられてきた既存の組織の機能的不調整ということ。图示されたもののうち、体育協会がその活動面から、この地方の社会体育の中心をなす形であるが、上述のような新しい事態に即した改善を必要としているにも拘らず、実は依然として選手中心の組織である限り、多くの人々の要求とは相容れないのである。組織の検討においても、地域社会における広い意味でのスポーツ人口の動向、ということが問題にされねばならないであらう。



直結関係 ==  
連絡関係 ——

## あとがき

沿革や事情にしても、記述がやや冗長散漫にわたったおそれがある。この地方の社会体育について組織、構造、領域、方法などといった点から、また指導者、プログラム、施設と個々の問題を一つ一つ検討することが、あるいは当を得た方法かも知れない。しかし乍ら、社会教育における体育運動についての研究は、その伸展の実際よりは遙かに後方を進んでいるようである。従って、今後この領域について話し合ったり、考えてゆく人々のことを思うと、また、筆者がこの稿の資料探しに不自由をしたことを考えあわせると、このような記述もあながち意味のないことでもないであろう。すでにお分りのように、この中には幾多の問題がそのままに置残されているが、以上のような所から諒とされたい。

なお、社会教育研究の大方からご批判、ご教示を得られれば幸いである。

### 参 考 書 誌

- 一、学事報告
  - 一、北辰会雑誌
  - 一、金沢市教育史稿
  - 一、石川教育
  - 一、児童体育の研究
  - 一、北国毎日新聞
  - 一、勤労者の職場スポーツ、レクリエーション活動
  - 一、北陸地方の体育に関する研究
- 石川県第二部学務課
  - 第四高等学校
  - 金沢市
  - 石川県教育会
  - 金沢市
  - 北国毎日新聞社
  - 村 本 恒 夫
  - 桜 井 栄七郎

- 一、社会体育
  - 一、社会教育研究
  - 一、日本スポーツの現状
  - 一、体育調査資料
  - 一、教育要覧
  - その他、文部省指定統計八三、県教委保健体育課、税務課、労働基準局資料
- 栗 本 義 彦
  - 金沢大学社会教育研究室
  - 文 部 省
  - 金沢市教育委員会